

腕

と

ら

愈

信風齋

卷柳小說

晚之ら

荷風小史著

はしがき

おのれ志いまだ定らざりし二十の頃よりふと戯れに小説といふもの書きはじめいつか身のたつきとなして數ればこゝに十八年の歲月をすごしけり。あゝ十八年曾我兄弟は辛苦をなめて十八年親の敵を打つて名を千載に傳へおのれはいたづらなる筆をなめて十八年世の憎しみを受け人のそしりをのみ招ぎけり十八年が同じ月日も用ゐかたによりて變るためしはもろこしに柳下惠といへる賢者は飴のあまきを嘗めて老ひたる親を養はんと申しけるを盜跖とよぶ盜人は人の家の戸に塗り音

せぬやうに引あけて忍入らんといひけるとぞ。さはさりながら敵をねらふ兄弟も男と生れしからにはそつと人知れず大磯の濡れ事ばかりは免れず今も昔も男と女客と妓女とのいきさつ此のみ寔に千古不易の人情とや申すべき。それは扱て置きおのれ今年の夏より秋にかけて宿痾俄にあらたまり霜夜の蟲をも待たで露の命のいとゞあやうく思はれければ十八年がこの歲月わが拙き文市に出る度毎に購ひ給ひける方々へいさゝか御禮のしるしまで新に一本をつゞりて笑覽に供せんものと思ひ立ちける折からこの小説腕くらべの一作幸雜誌文

明にはわづかに草稿の一部を掲げしのみなれば急ぎ訂正改作してその全篇を印刷する事とはなしぬ。然れどもこれとて未尙全く完結に及べるものにもあらざればいよくその後篇とも稱すべきもの幸ひにしてまた來ん春まで命保ち得たらんにはやがて書きつくべき折もやあらんまづそれまでは讀切のもの同様偏に御愛讀を冀ふとしかいふ

大正六年冬至の夜

作者 識

腕くらべ

荷風小史戯著

一 幕あひ

幕間に散歩する人達で帝國劇場の廊下はどこもかしこも押合ふやうな混雑。丁度表の階段をば下から昇らうとする一人の藝者、上から降りて来る一人の紳士に危くぶつからうとして顔を見合はせお互にびつくりした調子。

「あら、吉岡さん。」

「おやお前は。」

「何てお久振なんでせう。」

「お前、藝者をしてゐたのか。」

「去年の暮から……また出ました。」

「さうか。何しろ久振だ。」

「あれから丁度七年ばかり引いてゐました。」

「さうか、もう七年になるかな。」

幕のあく知らせの電鈴が鳴る。各自の席へと先を争ふ散歩の人で廊下は一時一層の混雑。その爲め却て人目に立たないのを幸と思つてか、藝者は紳士の方へ鳥渡身を寄せながら顔を見上げて、

「ちつともお變りになりませんね。」

「さうかな、お前こそ何だか大變若くなつたやうだぜ。」

「あら御冗談ですよ。この年になつて……。」

「いや全く變らないな。」

吉岡は眞實不思議さうに女の顔を目成るのであつた。この前藝者に出てゐた頃の事を思合はせると其時分十七八であつたから、七年たつたとすればもう二十五六になる譯だ。然し現在目の前に見る姿はお酌から一本になつて間もない其の時分と少しも變つてゐない。中肉中丈、眼のぱつ

ちりした下ぶくれの頬には相變らず深い笑靨が寄り、右の絲切齒を見せて笑ふ口元には矢張何處やら小供らしい面影が失せずにある。

「その中、一度ゆつくりお目にかゝらせて頂戴。」

「何ていつて出てゐるんだ。先の名か。」

「い、え、今度は駒代ッて申します。」

「さうか。その中呼ばう。」

「どうぞ……。」

舞臺からは早くも拍子木の音が聞える。駒代はそのまゝ自分の席へと廊下を右の方へ小走に立去つた。吉岡は反對なる左の方へと同じく早足に行きかけたが何と思つたか不圖立止つて後を振向いた。廊下には案内の小娘と賣店の女が徘徊するのみで駒代の姿はもう見えなかつた。吉岡は有合ふ廊下の腰掛に腰をおろして巻煙草に火をつけ思ふともなく七八年前の事を回想した。二十六の時學校を卒業し二年程西洋に留學してから今の會社に這入つて以來こゝ六七年の間といふものは、思へば自分な

がらよく働いたと感心する程會社の爲めに働きもした。株式へ手を出して財産をも作つた。社會上の地位をもつくつた。それと共に又思へばよく身體をこはさなかつたと思ふ程よく遊びよく飲んだ。彼はいつも人に向つて得々として云ふ如く誠にいそがしい身體なので、過去つた日の事などは唯の一度も思返して見るやうな暇も機會もなかつのである。ところが今夜偶然にも學生の頃始めて藝者といふものを知りそめた其の女に邂逅して、吉岡は自分ながらどういふ譯とも知らず、始めて遠い昔のことに思を寄せたのであつた。

何にも知らないあの時分には藝者といふものが何となく凄艶に見えた。そして藝者から何とか云はれるのが眞實嬉しくてならなかつた。今日あの時のやうな初生な清い心持にはならうと思つてもなれるものではない——吉岡は舞臺から漏れ聞える合方の三味線を耳にしながら、始めて新橋へ遊びに來た當時の事を思浮べ、我ながら可笑しくなつて獨り微笑を漏したが、それにつけて今は遊ぶが上にも遊馴れてしまつた身の上と思

及ぶと、これは又一寸人には話も出来にくい程萬事が拔目なく胸算用から割出されてのみゐるのに、自分ながら少し氣まりの悪いやうな妙な氣がした。乃公がはこんな方面にまであんまり伶俐れいれいに立廻り過ぎてゐた。どうも乃公は知らず／＼細密さいみつい處に氣が付き過ぎていかんのだと始めて自分を知つたやうな心持がしたのであつた。

全く其の通りかも知れない。吉岡は今の會社に這入つてまだ十年にならないのに早くも營業係長の要路に用ひられ社長や重役から珍らしい才物だと云はれてゐるだけ、同僚や下のものにはあまり受のよい方とは云はれない。

吉岡は新橋に湊家といふ看板を出してゐる力次といふ藝者をば三年ほど前から世話をしてゐる。然し有ふれた旦那のやうにたわいなく鼻毛をよまれてゐるのではない。吉岡は力次の容貌のよくないことは其の目で見る通りよく承知してゐる。容貌はわるいが藝はたしかである。何處へ出してもまづ姐さんで通れる女である。吉岡は世の中の仕事をして行く

上から宴會其の他の事で藝者の一人や二人は自分のものにして置く方が却つて何かの便利にもなるし又無駄な物費ものいが除けると見て、此方こつちから打込んだやうな風を見せて手に入れたのであつた。

吉岡にはもう一人妾同様にしてゐる女がある。それは濱町に相應な構をしてゐる村咲といふ待合の主婦むかひである。以前代地邊の料理屋の女中をしてゐる頃、吉岡は藝者遊にも飽きかけた人が往々にして飛でもない厄介を背負込おむためしに漏れず、ふと酔つたまぎれに手を出したが、醒めて見るとお茶屋の女中なんぞに手をつけたといふ事が日頃宴會で出逢ふ藝者仲間知られては堪たらないと後悔したのが、女の方のつけ目である。一切この事は秘密にして後腐おとしなしにするからといふ約束で今の待合村咲を開業する資金を内々で出してやる事にした。村咲は運よく繁昌して毎夜お座敷が足りない位の景氣、さうなつて見ると尠せうからぬ資金を出しつばなしにして寄付かないもの馬鹿々々しいと云ふ氣が起つて、吉岡は一度二度と呑みに行く中いつか又内所で關係をつけた。おかみは色の白い肉

付のいゝ大柄の女で今年三十になる。素人の女に比較すれば無論垢拔がしてゐるが、さりとて藝者に比べると其れだけの品がなく又どことなしに濃厚な重苦しい感じがする。即ち花柳界の女中に特有な逞ましい物腰恰好が酔つたまぎれの折々、吉岡の精神ではなくて唯其の姪慾を動すのであつた。それ故關係をつけては直に後悔し、後悔しては又忽ち關係をつけるといふ始末で、再三焼棒杭になつた後今はどうやら腐縁とでも云ふやうな間柄になつてゐるのであつた。

吉岡はそれやこれやの複雑な關係に比較して、相手の駒代はたしか十八自分はたしか二十五、互に何が何やら分らずに馴染を重ねた其の時分の單純な無邪氣な心の中を思返すと、自分ながら何となく芝居か小説でも見るやうな美しい心持がして来る。美しいだけにたわいがなく又何やら眞實らしからぬ變な氣もするのであつた。

「や、こゝにおゐでゝしたか。先刻から方々お尋ねしてゐたです。」

洋服をきた身丈の低い肥つた男。二階の食堂で大分ウイスキーでも傾

けたらしく惠比須のやうな圓い顔をば眞赤にし鼻の先には玉の汗をかきながら、さつき電話がかゝりました。」

「どこから。」

「いつもの處です。」と身丈の低い肥つた男はあたりに人のゐないのを見定めて、吉岡の側に腰をおろし、近頃は湊家の方へはあんまり御出馬がないと見えますな。」

「君のところへ電話が掛かつたのか。」

「實は誰かと思つて少しは自惚れましたね。ところが例の如くて、われながらナトお氣の毒でしたなは、は、は。」

「君、力次は今夜僕等がこゝにゐるのを知つてると見えるね。」

「屹度誰か連中の見物にでも來てゐたのが知らせたんでせう。お歸りに是非一寸でいゝからお寄り下さるやうにといふ事です。」

「江田君、實はそんな事より今夜は少し珍談があるんだがね。」と吉岡は金口の巻煙草を江田にすゝめながら四邊を見廻し、「食堂へ行かう。」

「また濱町の件ですか。」

「いや、そんな舊聞ぢやない。ロオマンズだ。」

「え、何です。」

「小説見たやうな話があるといふのさ。」

「さうですか。面白さうですな。」

江田は合槌を打ちながら廊下を地下室の廣い食堂へとついで行つた。

「君は相變らずウイスキーだつたね。」

「いや、今夜は少し廻つてゐますからビールにして置ませう。また腰を抜かすにはちつと早過ぎませうて、はゝゝゝは。」

江田は顔中を皺だらけに身體を揺上げて笑ひながらハンケチで額の汗を拭く、其の様子なり其の物云ふ調子なり誰が見てもすぐ吉岡の幫間と知られるのである。縮れた薄い頭髮は大分禿げ上つてゐるが年はさして吉岡とは違つてゐるのでもないらしい。吉岡の切廻してゐる會社の株式係の一人で、宴會だの園遊會だのある折にはいつも接待係をつとめる處

から、營業係長の吉岡さん同様に花柳界には顔が賣れてゐる。何處へ行つても○○會社の江田さんと云へばお酒の好きな罪のない、（へうきん）縹々な方だと藝者は勿論お茶屋の女中までが心安立に折々は随分失禮な事を云ふが江田は決して怒つたことがない。女達から馬鹿にされたり挑（か）戲はれたりすると益々調子に乗つてわざと自分から三文の直打（なぐ）もないやうに自分の身を軽く取扱ふ。然し家には小供が三人もあり其の長女はそろ／＼嫁の口をさがす年頃だと云ふ事である。

「珍談とは一體何です。」とボオイの置いて行つたビールを片手にしながら江田はいかにも聞きたさうに力を入れて、「まさか拙者を出（だし）抜いて新色のおのろけちや有りますまいね。はゝゝは。」

「實はさう有りたいたんだがね。」

「へゝえ。これア大分罪が深さうですな。」

「江田君、ひやかしちやいかなよ。僕は今夜始めて女に迷つたやうな氣がした。」云終つて吉岡はあたりに人もやあると見廻したが廣い食堂には遠

い片隅にボオイが一三人寄つて話をしてゐるばかり、見渡すかきり人の
ゐない卓子アブの白布に電燈の光の照添うて其の上に置いた西洋草花の色を
ば一層鮮あざやかに輝してゐるばかりである。

「江田君これア眞實まじめな話だよ。」

「はゝア此の通謹聴してゐます。」

「いかなア。いつでも君には冗談ばかり云ふもんだから……眞剣な話
はどうもしにくい實はその何だ。先刻階段まづきの處で偶然出遇つたんだがね
……。」

「ふむく。」

「僕がまだ學校にゐた時分知合つた女なんだがね。」

「お嬢さんですか。どこかの奥様になつてゐると云んでせう。」

「氣が早いな。素人しらとぢやない。藝者だよ。」

「藝者ですか。して見ると随分早くから御修行なすつたもんですね。」

「あれが、その僕が道樂をし出したそもく、一番初めの藝者なんだ。其の

時分駒三と云つてゐたんだ。さうさ、一年ばかりも遊んだかな。さうかうする中に僕は學校を出てすぐ洋行するんで、其の時には相應にまア片たまをつけて別れたと思ひたまへ。」

「ふむく。」と江田は吉岡から貰つた葉巻を惜し氣もなくスバリくくと吸つてゐる。

「七年ぶりで新橋へ出たんだとき。駒代といふんださうだ。」

「駒代……家はどこです。」

「名前を聞いたばかりだから、自分で店を出したのか、それとも借金をしたのか其の邊の事は何にも知らない。」

「外のものに内々で聞いて見ればすぐにわかりませう。」

「兎に角七年も引いてゐて又出たんだといふから何れ仔細があるに違ひないさ。今までどう云ふ方面の人の世話になつてゐたんだか、實はその邊の事も知つて置きたいんだがね。」

「大分御詮義が細こまかうございますな。」